

(特典付録)

シアトル滞在記(日常編)

ここから先はどうでもいい内容だが、海外で暮らしていく上で、うまくいった点、ちょっと反省している点などをメモとして残しておきたい。

日常生活

少しでも多く英語を話す機会が作れればと思い、外国人とシェアできる部屋を探した。ある事情で、お金がなかったことも理由である。しかし、新学期早々にもかかわらず、3ヶ月限定で部屋を探すのは難しかった。「契約は1年以上」という理由で、断られたことが多い。幸い、知人に紹介してもらった不動産屋(シアトルでは珍しいらしい)で、いいアパートを見つけることが出来た。ちなみに、10件ほど物件を実際に見たが、ほとんどのものが大変汚く、さすがの私でも無理そうだった。我が家から大学までは徒歩10分、間取りはリビング、キッチン、バストイレが共同で、寝室のみ別、家賃は光熱費など全て込みで月450ドルだった。食費なども入れると、生活費は月1000ドルぐらいだったと思う。ルームメイトは、ネイティブアメリカン(Choctaw族)のWillisおじさん(41歳)で、大学では日本語を学んでいたらしく(単語を知っている程度だが)、異文化への興味が強い人だった。元海兵隊員で、現在はレストランで働いている。彼とは毎晩テレビを見ながらバカな話をしたり、ネイティブアメリカンの文化や不幸な歴史、アメリカ社会が抱える問題について、うだうだ話し合った。酒を飲むと、たまに話がくどくなるのが困ったところだが、普段はとても陽気な紳士で、今回のアメリカ滞在がうまくいった理由は、彼との共同生活に依る部分が多かったと思う。



我が家(左:3階の角部屋)とノリノリのWillisおじさん(右)

二人ともケーブルテレビをひくほどの経済力がなかったので、テレビは地上波しか見られなかったが、それでも10局以上あった。半数以上の番組では英語字幕が出るので、リスニングの練習にはとてもよかった。ただし、コメディなどは字幕を読んでも、内容がよく分からなかった。聞き取れない以外にも、英語が理解できない理由があるようだ。いまアメリカでは、「リアリティー番組」というジ

ャンルが流行っている。これは素人 20 名ほどが 2 チームに分かれてゲームを行い、負けたチームから毎週一人ずつ脱落していき、最終的に生き残った人が優勝というスタイルだ。脱落する人はチーム内の罵りあいでは決まるといってもアメリカ的な番組だが、毎週見ていると結構はまってしまふ。優勝賞金は 100 億円だ。またシアトルでは海外の情報はほとんど入ってこなかった。メディアの情報統制が厳しいからだというのが Willis おじさんの解説である。大統領選挙(11 月 2 日、州知事選や市議会選なども同時)の前は、相手候補を批判する CM ばかりで、少々ウンザリした。ちなみに、シアトルは民主党が強い地域であり、ブッシュの勝利にみんな落ち込んでいた。

大学の周りにはいわゆる学生街があり、食堂やスーパーなど生活に必要なものは全て揃っていた。家と職場の往復だけではつまらないので、食事はほとんど外で食べていた。訛りの強い英語との戦いも楽しみの一つである。食堂のうち、3 分の 1 は「テリヤキ屋」という鳥の照焼をメインにした日本風食堂なのだが、なぜか韓国人が経営していることもあり、それほど美味しいものではなかった。ただ毎日米を食べることが出来るという点は、米好きの私としては助かったが、牛丼やカレー、ラーメンなど「普通」のものが食べたくて仕方なかった。他には中華料理、タイ、ベトナムなどのアジア料理やメキシコ料理などの店が多かったが、どれも味はそこそこだった。海に近い割には、魚はスーパーなどでもあまり見かけなかった。

家を借りたり、銀行に口座を開く際は、パスポートの提示だけでよく、特にソーシャルセキュリティーナンバーは不要だった(取得は可能)。銀行口座も小切手を使うために開設したが、我が家の場合は家賃の支払いは現金で十分だった。しかし、銀行のカードは、デビットカードとして使えるので、ちょっとした買い物の際は便利である。ワシントン州ではアルコールを買う際に ID の提出を必ず求められる。また NMFS の研究所など政府系の建物に入る時も ID を求められることが多い。そのような時は、ワシントン州の交通局が発行している ID カード(免許証と様式は全く同じ)を提出すればいい。この ID カードさえ持っていれば、ワシントン州では無敵である。

シアトルという街

秋のシアトルはとにかく雨が多かった。0.1 ミリ以上雨が降った日数は、14 日間(10 月)、17 日間(11 月)、17 日間(12 月)だった。雨量は多くないのが、毎日どんよりとしていた。しかも、緯度が樺太と同じとあって、とても寒い。氷点下になることは少ないが、昼間に気温が上がらないため、気温以上に寒く感じた。毎日冷たい雨に降られるという意味では、最悪の環境だった。しかし、これでも今年には暖冬らしく、反対に雪が降らないため、スキー場がオープンせず、スキーを計画していた私としては、その意味でも最悪だった。洒落で「もう二度とこんな街には来たくない」と言ったら、「頼むから、もう一度夏に来てくれ」とみんな言っていた。春から夏にかけては天気も良く自然が美しいそうだ。そんな時期にまた行ってみたいと思う。

12月のシアトルの天気(晴れマークが4つしかない)

家からダウンタウンまではバスで20分ほどだが、ダウンタウンはそれほど大きいものではない。静岡駅前と大差ないと思う。ただし、ここにある中央図書館は昨年オープンしたばかりで、館内にカフェがあったり、無線LANが無料で利用できるなど、大変居心地が良く、週末はここで時間を過ごすことが多かった。宇宙船のような奇抜な外観も手伝って、すっかり観光名所になっていた。外国人でも図書カードを作ることが出来るので、本やビデオなどを自由に借りることができる。シアトルーのお勧めスポットである。

雨が多く、外で遊べないこともあったが、シアトルにはカフェが多い。大げさに言えば、街角毎にカフェがある感じだ。スターバックスの発祥地でもある。こちらのカフェは日本と比べると比較的ゆったりしていて、本を読んだりするのにちょうどよかった。従業員が気軽に話しかけてくるので、最初は驚いたが、慣れるとそれも楽しかった。問題は私があまりコーヒー好きではないことだったが、ホットチョコレート(ココア)を飲むことで解決した。休日には、映画にもよく行った。1本9ドルが基本だが、回数券を買えば6ドルで見ることが出来た。毎週3、4本新作が上映されるので、見る作品に困らなかったが、どちらかという外国映画(非アメリカ映画)の方が面白かった気がする。図書館に行くと、カフェでお茶を飲んで、映画を見て、家でWillisと酒を飲む、というのが典型的な休日の過ごし方だった。とても健全で文化的な暮らしだ。



秋のパイオニアスクエア(左)、クリスマスのダウンタウン(中)、10階建ての中央図書館(右)

シアトルには、マイクロソフト、スターバックス、アマゾン、ボーイングなどの世界的企業がある。その

ため、街自体は豊かなようだが、なぜかホームレスも多く、お世辞にも治安はあまり良くない。実際、家の近所でも、発砲事件があった。薬物の問題も深刻なようだ。しかし、これでも全米の都市の中では一番住みやすい都市の一つであるらしい。よくわからない国だ。

パーティー

ちょうど滞在中に、ハロウィン、感謝祭、クリスマスとイベントが続いたこともあって、毎週のようにパーティーが開かれていた。「酒の誘いは断ってはいけない」という学生時代の指導教官からの教えを守り、ほとんど全てのパーティーに参加した。知らない人ばかりで、その場に飛び込むには結構気合いが必要なのだが、パーティーだと一対一で話せるので、相手も私の英語力に合わせてくれることが多く、仲良くなるキッカケには非常に効果的だったと思う。一度仲良くなれば、しらふの時でも議論がしやすかった。ただ仲良くなればなるほど、話が深くなり、それに英語力が追いつかず、苦労した。もう少し前もって英語の勉強をしておけばよかった、と何度思ったことが。

水産学部主催のセミナーの後には、有志によって時折ワインテイasting大会が行われ、これもなかなか楽しかった。ハロウィンや感謝祭では、ホストの自宅に呼ばれることもあったが、家族や恋人同伴のホームパーティーというのもなかなかいいものだなと思った。感謝祭では、国際色豊かなパーティーに誘ってもらい、アメリカ人だけでなく、南米、ヨーロッパ、アジア等 10 カ国以上の人たちと話すことができた。こんなことは数年前には想像すら出来なかったことである。みんなフレンドリーで、面白い人が多かったが、反対に、彼らはまぐろの研究をする学生みたいな日本人のことをどう思ったのだろうか。ちなみに、イチローのことはどこでもよく聞かれる話題である。野球に詳しくてよかったと思った。それにしても、よく遊んだ 3 ヶ月間だった。



ハロウィン(左:さて私はどこにいるでしょう?)、感謝祭(右:友人宅)

英会話

Ray Hilborn の研究室には 10 名ほどの学生がいたが、学生といっても、年上の人も多く、ほとんど同世代である。大学では、学生さんたちと同じ部屋に机をもらうことが出来た。さぞかし英語を使う機会があるのだろうと初め思っていたが、普段はみんな黙って仕事をしていることが多かった(よく

考えると当たり前だが)。またすぐに帰宅してしまうため、意外と話す機会は少ないことに気づいた。下手をすると、一言も話さずに一日が終わる。さらに Ray の研究室は、外国からの留学生が多いため(特に南米から)、外国人の受け入れに慣れていて、ある意味ほったらかしだった(それはそれでいいのだが)。媚びを売る気も邪魔をする気もなかったので、普段は大人しくしていたが、パーティーなどの場では積極的に話すことを心がけた。その甲斐あってか、3 ヶ月という短い期間の割には、随分仲良く慣れた気がする。みんないい奴らだった。同世代の研究者との交流は大きな財産になると思うので、今後も公私共々仲良くしていければと思う。Ray とは少しオフィスが離れていることもあり、普段会う機会はあまりなかった。もう少し話す機会を設けてもよかったかもしれない。



珍しく天気の良い日の水産学部(左)、サケの標本もクリスマス(右:大学構内にて)

その分というわけではないが、ちょうど家の近所に英会話学校があったので、仕事の後、週 2 回ほど通ってみた。ポール先生(45 歳)とのマンツーマンのレッスンだったが、最初の頃は正しい発音を教えてもらった。“r と l”の違いよりも、日本人は“s と z”、“f と v”“th”などの発音がうまくできないようだ。“seven thousand southern bluefin tuna”と毎日練習しろと言われたが、そう簡単に出来るものではない。実はセミナーの原稿はポールと一緒に作り、なぜか英会話学校でセミナーの発表練習をした。というわけで、今やポールはやけにミナミマグロについて詳しい。彼はなかなかの役者で、人の気を引くためのプレゼンのコツなどもアドバイスしてくれた。これもなかなか楽しい作業だった。後半は新聞を読みながら、主に時事問題について議論したが、彼もアメリカの将来を心配する人間の一人だった。教育と家庭に大きな問題を感じているようだ。本業は(売れない?)ミュージシャンで、トルコ音楽が好きらしく、尺八のような楽器を練習していた。レッスンの後、ご飯を一緒に食べるなど、彼ともいい友達になれた気がする。

日本でもここ 2 年ほど学校に通うなど多少英会話の勉強はしていたが、少なくともこの 3 ヶ月で得た経験は過去 2 年分に匹敵する価値はあったと思う。しかし、実際どれだけ英語がうまくなったかという正直よくわからない。本気で話されると、さっぱりわからなくなることも相変わらず多かった。周りの人たちは「随分うまくなった」と言ってくれたが、単に最初がそれほどひどかっただけかもしれない。ただ、ジョークを言い合うなど、ある意味「外人さんに慣れる」ことは出来たと思う。国際会議でバリ

バリ活躍するにはもう少し修行が必要だと思うが、外国人に対する変なコンプレックスがなくなった点では、随分たくましくなったと思いたい。英語は突然うまくなる性質のものでなさそうなので、今後も地道に精進を重ねるつもりである。

スポーツ観戦・旅行

シアトルに到着した当日(10月1日)、Jim Iannelli がシアトル・マリナーズの試合に連れて行ってくれた。1球ごとに球場中からカメラのフラッシュがたかれるという異様な雰囲気の中で、この日イチローが最多安打の大リーグ記録を更新した。たかが野球とはいえ、なかなか感動的な瞬間だった。Jim はいい仕事をした。他にも、バスケット NBA のシアトル・スーパーソニックス、アメリカンフットボール NFL のシアトル・シーホークス、アイスホッケーの地元リーグ戦を観戦することができた。バスケットの試合は、残り10秒で追いつき、延長で逆転するというスリリングな試合だったが、観客を飽きさせないためのアトラクションもよく練られていて、大変満足だった。ビールを飲みながらのスポーツ観戦は気分転換にうってつけである。プロアイスホッケーリーグ NHL がストのため見る事が出来なかったのが残念であるが、アメリカ4大スポーツを制覇することが出来た。



イチロー記録達成の瞬間(左)、バスケット(中)、アメフト(右)

シアトルにばかりいるのも退屈なので、12月の土日を利用して、カナダのバンクーバー(北)とオレゴン州のポートランド(南)に行ってきた。滞在中、車には乗らないようにしていたので(シアトルはなんか危なそうだった)、カナダへはバス Greyhound(往復50ドル)で、オレゴンへは鉄道 Amtrak(往復75ドル)を利用した。どちらもほぼ時間通りに運行されていたが、電車は町中でよく止まっていた。車が踏切内に入ってくるのが原因だそう。困った人たちだ。バンクーバーはシアトルによく似た雰囲気のある街だったが、とにかく寒かったという印象しか残っていない。ただし、コロンビア大学の人類学博物館はネイティブアメリカン関連の展示が充実していてなかなかよかった。寿司も美味しかった。反対に、ポートランドは小さいながらも魅力的な街で、巨大な本屋とフリーマーケットがあって、ずいぶんお金を使ってしまった。その意味では危険な街だった。次回は自然を楽しむために、もう少し季候のいい時期に行ってみよう。



バンクーバー・ガスタウン(左)、ポートランドのサタデーフリーマーケット(右)

サバイバルのこつ

シアトルに着いてすぐの頃、大学で、留学生を対象とした説明会があり、カウンセリングの専門家による講演を聞いた。その人は「留学生は、はじめ旅行者と同じで、気分がとてもハイだが、その後、現実の困難さにぶつかり、ひどく落ち込む。だけど、「1年」もすれば、新しい世界に適應できるようになるので、心配要らない」と言っていた。そんなことを CCSBT の科学委員会直後で疲労困憊、しかも3ヶ月で帰国しようとしている私に言われても困るなあと思ったことをよく覚えている。正直言って、日々の気持ちの浮き沈みは、普段よりかなり大きかったと思う。言葉の問題に加えて、新しい労働環境、気合いの空回りなど、いろいろ原因はあったと思うが、ノイローゼにならないよう、とにかく体調を整えることに気を付けた。とにかくよく寝て、よく食べた。結果的には、3ヶ月の割にはそれなりに新しい環境に適應できたと思う。健康であったことが適應できた一番の理由だと思うが、他にも Ray や Jim、岡村さんなど知り合いが周りにいたことや、それなりに順調に研究成果を出せたこと、ワシントン大学が期待通り面白かったこと、馬鹿話のできるルームメイトがいたことなども、大きな理由だと思う。特に岡村さんには同じ苦勞を共有する同志として、いろいろお世話になった。お礼を述べたい。新しい環境に飛び込めば、それなりに大変なことも多いが、今回は苦勞をはるかに上回るものを得ることが出来た。その意味では、今回の在外研究は大成功だったと思う。